



歴史と現代建築の調和—弥生小学校新校舎—

第208号



◇ 巻頭言 ◇

夕陽は一つ!

副会長 天野 哲 征
(昭和41年卒)

この度の「複数学部化構想」に再考を求める「道南の教育を考える会」の「署名活動」を通して、私は「夕陽は一つ」という思いを改めて抱いた。非力が自他公認の私に事務局長を命じた安島顧問・橋田会長にまずはお詫び申し上げねば私の筆は進まない。

六月の総会で橋田会長が複数学部化構想には「物を申ししていくと宣言したのはご承知の通りだが、その後会長は大学本部Ⅱ学長に対する話し合いを再三再四行ってきた。また星野副学長も函館校をまとめるべく奮闘され、教員養成機能存続については函館校内の過半の賛意を得た。既に関昔の話だが、昭和六十三年に総合科学課程が設置された時、私の師が「同窓会が物言わねばならない時が来た」と話されたことを今思い出している。

(平成十八年、函館校は「人間発達専攻」をはじめとする五専攻で「人間地域科学課程」として再編され現在に至っている。そして今回、函館校に示されたのは、教育学部から「国際地域創造学部」への移行であり、「国際地域学科」では残念ながら人間発達専攻の流れを汲む「コース」がはずされ学生数も減らされている。その上更なる大きな譲歩Ⅱ教員養成機能廃止を迫られているのだから、私たち夕陽も声をあげずにはいられない。このことについては安島顧問・川島顧問も声を荒げて本部に幾度も話をしてきたところである。

二十月十七日、橋田会長と心を込めた署名四簿冊(二万八百九十三筆)を文部科学副大臣に手渡し、「地域の声を無視することはない」という答えをいただいた。更に、大協力者である寺島乙部町長が檜山管内七町村の首長と教委委員長の十四氏の公印を押した文科大臣宛の教員免許取得維持に関する要望書を作成、それを中川眞一郎前副会長が届けてくださった。十月二十九日には早速、札幌の青柳副会長と、その「要望書」を大学本部に持

ち込んだところである。残念ながら学長には面談できなかったが、総務部長にその重さのある「要望書」を手渡した。退室する時、大学職員全員が起立をし私たちを見送った姿を見て、この問題が大学にとって大きな事態であることを感じ取り帰函した。

十一月五日には、南北北海道市町村連絡協議会が開催され、各首長が「地域に根ざした教育がなくなれば教育水準が下がってしまう」「地域を挙げて要望活動をする方が効き目が増す」等の意見を挙げてくださいました。有り難いことである。また議長の工藤函館市長は遅くとも年内に大学本部や文科学長に存続を求めると表明「副学長や同窓会長との理解を深めながら進めたい」と報道陣に語った。

二万余の署名数は決して大きくない。しかし、私たちの行動が確かに首長に伝わった。これまでも皆さんの方にご指導いただいたが中でも消費者大学の岩船寛学長には署名簿の作成や今後の方向付けなど大変なご尽力をいただいた。ここで厚くお礼申し上げます。

函館校発行の『人間と地域』第四号(三月発刊)の中に函館市民の評価と期待のページがある。その中に「大学の存在自体、それによる教職員・学生が地域社会にもたらす経済効果は大きい、地域社会はそれ以外の地域貢献を求めるようになつてはいる」とある。それは私たち夕陽にも当てはまる事だ。夕陽が内向きになつていてはいけない。夕陽人が土地墾闢、のご沙汰をいただいた時から、教えるべき子どもがいる土地で風となり鎌を振るべき土を耕し、悠然とした営みをするのが夕陽だった。今は自分自身にそのことを問い返し続けながら生きなければならぬと思つている。この活動が更に多方面の市民の皆様にご理解ご協力ご支援いただけるようまだまだ頑張ります。どうぞよろしくお願いたします。

函館校の新学部化への動きについて

夕陽会事務局

平成二十四年度の総会でもお伝えしましたが、教育大学函館校が小学校の教員養成機能を無くし、国際地域創造学部(仮称)へ移行を図っていることについて、ご心配されている向きも多いものと拝察いたします。そのため、ここでは六月の総会以後十一月直近までの動きについてご報告いたします。

五月十七日を境に札幌の教育大学本部が、函館校の小学校の教員養成廃止を打ち出して以来、函館校を巡る状況は激変いたしました。幸い、関係各所のお力添えや国家戦略会議の国立大学についての方針変更などもあり、来年度からの実施については先延ばしとなりましたことは総会でご報告のとおりです。

その後、「道南の教育を考える会」が立ち上がり、夕陽会と連携しながら、大きく三つの動きを加速させました。一つ目は、大学のフォーラムの開催、二つ目は、署名活動の展開、三つ目は道南の首長部局への働きかけです。

まず、大学のフォーラムの開催ですが、七月二十九日に「函館校の未来を考えるフォーラム」を開催し、地域のPTA関係者、企業人、高校の校長先生、そして、教育の分野からは、田中健一知



内町教育長の四人をパネリストとしてお願いし、函館校の進むべき未来についてお話いただきました。

当日は、内山後志支部長と栗田札幌市支部長などにもお越し頂き、約三百名の方々の参加を得て、地域にこういった問題が起こっていることをアピールすることができました。

続いて、署名活動ですが、当初、大学が一年先延ばしされた案を、すぐそのまま文科省に提出するような動きを見せておりましたので、なんとかこの動きに対抗すべく、前納会員の皆様に向けて、七月の会報のお届けと同時に、署名のお願いを行っておりました。

期間が八月一杯という短い期間にもかかわらず、皆さんの署名をお届けいただき、付属学校PTAや、小山昌吾先生を始めとする先輩諸氏の丹念な署名集めの活動もあり、

九月末の時点で二万一千筆を得ることができました。

この署名を、橋田会長と道



南の教育を考える会の天野事務局長が、逢坂誠二衆議院議員の紹介で十月十七日に文科科学省にお持ちして、笠浩史副大臣にお届けして参りました。

三つ目の取組として首長部局への働きかけを行いました。六月二十九日に北斗市の高谷市長にお会いして協力要請を行い、北斗市より七月七日に、文科省に向けて教員養成機能存続の要請文が提出されました。

七月二十六日には乙部町の寺島町長を訪ねて、同様の要請を行い、寺島町長からは、「檜山は北海道でも学力が課題になっている地域でもあり、その地域の教育を支える人材を地域でこれまでどおり輩出できるように働きかけたい」といった力強いお言葉をいただきました。



この後、檜山の教育長会の会長である江差町の新木教育長ともお話し、檜山七町の首長、教育委員長が連署した要望書が十月十六日に文科科学省に届けられました。この檜山の要望書の写と先の署名請願の写は、天野事務局長、青柳副会長の手によって、十月二十九日に大学本部にも届けられました。

また、十一月五日には道南の十八市町の首長が参加する南北北海道市町村連絡協議会でこのことが話題となり、函館市の工藤市長を先頭に十八市町の要請として、年内に大学本部と文科科学省に教員養成機能の存続を求めていくことが決まりました。

十一月八日には夕陽会の役員・顧問・参与会と道南の教育を考える会との合同会議が開かれ、これまでの一連の経緯の

報告と、今後の二次活動について話し合いが持たれました。

また、十一月十二日には、函館市の工藤市長、中林副市長、片岡副市長、能登谷議長と道南の教育を考える会の安島代表、橋田会長が懇談し、今後の本活動への更なるご支援をお願いしたところです。

大学本部は、「新学部はこれまでどおり」といった談話を十月十九日付の新聞で発表するなど未だ先鋭的な状況が続いておりますが、我々の活動や函館校の道南地区の教育に対する思いが、いろいろなところに浸透してきており、このことは、文科省より出された「地元からさまざまな意見が出ていますので、大学はよく地元と話し合って計画をまとめてほしい」旨の談話に顕れているものと考えております。

未だゴールは遠いのですが、今後も市町村への働きかけや、署名集めなど、教員養成機能の維持に向けた第二次の要請活動に取り組んで参ります。

この度の会報にも、署名の用紙を同封させていただきました。未だ署名をお送りいただけない会員様や、趣旨に賛同いただき、さらに署名を集めて下さるお気持ちを持って下さった会員様のお力添えを改めてここにお願ひ申し上げ、これまでのご報告とさせていただきます。





函館校の今とこれから

北海道教育大学副学長 星野立子

(函館校担当)

今年四月から函館校担当副学長としてキャンパスの運営に携わっております。

ご存じのように、本学では複数学部化を検討しておりますが、その中で、函館校の学部化に関しては大きな課題を抱えています。

この件に関わり、夕陽会の橋田会長をはじめ皆様には、本年七月に行いましたアンケートや同月二十九日の「函館校の未来を考える会」等主催のフォーラムなどで、特段のご協力をいただき、心から感謝申し上げます。

平成十八年度の改組により、函館校は人間地域科学課程となり、その他、大学院教育学研究科と養護教諭特別科を有しております。

人間地域科学課程では、人間発達専攻、国際文化・協力専攻、情報科学専攻、地域創生専攻、環境科学専攻という五つの専攻で、人間と地域の探究を柱とし、「人と人、人と地域をつなぐ」をモットーに教育を行っております。それぞれの専攻・分野の専門性を重視すると共に、幅広い教養を身に付け、地域や国際社会に積極的に貢献できる人材の育成を目的としています。

外国語教育については教養科目として八つの外国語を開講しており、この十月に開所したばかりのマルチメディア国際

語学センターの活用が期待されます。

学生数は一学年約三三〇名で、学部生はかなりの数になります。今年三月卒業生の進路に関しては、民間企業が46%、公務員が9%、教員が19%、大学院等進学者が7%となっております。過去二年間の進路と併せましても、民間企業が45%前後、公務員が10%前後、教員が20%前後となっております。

キャリア教育においては、キャリアセンター函館校センターの強力なサポートのもと、学生たち自身の努力もあって実を結んでおります。前述したフォーラムでも、パネリストの一人が「函館校にはいろいろな進路の選択肢があり、地域の高校生にとってはありがたい」と言ってくれました。人間地域科学課程の良さの一つはそこにあるのだと思います。一方で、全国の大学の中でも教員養成系は常に厳しい状況に晒され、現在も「国立大学のミッションの再定義」において、真つ先に課題を与えられております。

このような状況がある中で、今年八月の中教審答申では、日本の大学進学率(49%)が二〇〇九年時点で経済協力開発機構(OECD)加盟国の平均(59%)を下回り、主要国の中で唯一、ここ二十年で高等教育機関への進学者が減っていると指摘されており、函館校としても、高等教

育機関としての役割と意義を改めて認識する必要があります。

私事で恐縮ですが、先頃、数年間続いているゼミ四年生の東京研修を行いました。東京で書店や図書館めぐり、ミーティングを行い、演劇鑑賞をするという内容です。この行事の楽しみの一つが、卒業生を交えた懇親会です。今回も、卒業生が四名顔を出してくれました。東京の企業で働いていたり大学院生であったり、それぞれの職場や大学院で奮闘している様子が分かり、心から嬉しく思いました。

このような時にふと思うのが、大学教育の意味です。もちろん卒業生にとつて現在いる職場等の社会から得るものは大きいでしょう。しかし、彼らを支えているのは、大学時代を含めて培った知識と生きる姿勢だと思えます。

学生たちには、大学で様々な知識を得る中で、人間性を高め、高度な知識を有した教養人として成長してほしいと思っております。また、大学時代に確立した姿勢はその後社会に出ても有効に働くと、期待を込めて考えております。

先ほどのフォーラムでは「教員養成を看板にしている大学だけあって、優秀な学生が入っている」という声も聞かれました。企業のインターンシップでも受け入れ先から高い評価を得ております。これらの評価は、本校が地域で一定の社会的な役割を果たしている証と言えます。

総じて、現在の函館校の特色は、コミュニケーション力等を持ち、幅広い教養と

深い専門的知見をもとに、「人と人、人と地域をつなぐ」総合的な力を有した人材養成と言えるでしょう。

再来年二〇一四年に函館校は百周年を迎えます。歴史と文化のまち函館において、本校はその地域環境と歴史的背景を生かし、地域の活性化に寄与する教育、研究を行っておりますが、今後も益々地域に貢献し愛される大学として活動していきたいと存じます。

皆様がたの今後一層のご支援をお願い申し上げます。

平成25年度 全国支部長会議・本部総会・懇親会

◆期 日 平成25年 6月22日 (土)

◆会 場 函館国際ホテル

(函館市大手町 5-10 ☎0138-23-5151)

- ・全国支部長会議 午後 1時30分～午後 3時30分
- ・総 会 午後 4時～午後 5時
- ・大 懇 親 会 午後 5時30分～午後 8時

函館校の未来を考える フォーラムを開催

「北海道教育大学函館校の未来を考えるフォーラム」が七月二十九日、函館校の未来を考える会、北海道教育大学函館校、北海道教育大学夕陽会の共催で、函館校第一講義室を会場に開催された。

フォーラムはパネルディスカッション形式で行われ、パネリストとして四名が出席。それぞれの立場から、函館校のこれまでとこれからの役割や将来像について意見交換し、函館校のより良い未来像をフロアーとともに討論しあった。

六月中旬、函館校が教育学部から国際地域創造学部（仮称）へ再編されるとの構想が、一年先送りされたことを受け今回のフォーラムの開催となった。

フォーラムは、地域各界から四人のパネリストを招き、函館校がこれまで道南圏域において担ってきた役割や将来像について、意見を交換し、地域総ぐるみで同校のよりよい未来を探ることを目的に開かれ、会場には教育関係者や卒業生を中心に、三百五十人が参加し、気温三十三度近い真夏の暑さの中で熱く語り合った。最初に、主催者を代表して、開会挨拶に立った「函館校の未来を考える会」の安島進会長は、函館校の再編が一年先送りになったことについて、「本日のフォーラムでは、これまで有為な人材を育成してきた函館校の役割について再確認し、地

域再生の核となる大学の将来像について語り合いたい」と呼びかけた。

続いて、壇上に立った星野立子副学長は、函館校のこれまでの学部変遷の経緯を説明、また抽出で行われた同窓生へのアンケート結果を報告した。

アンケートの中で、今後目指すべき大



挨拶に立つ安島代表

学の姿を質問したもので、「地域再生の核となる大学」「生涯学習の拠点となる大学」が多くを占め、地域の拠点としての期待の大きさを裏付ける形となった。

また新学部の形態では、「ほとんどが」教員養成機能をもった新学部」を希望していることがわかった。

引き続き行われたパネルディスカッションでは、函館市PTA連合会の青田基会長が「保護者の経済的負担から考えると、地元で大学があるというメリットは大きい。職業選択の幅から考えても、教育学部を含め多様な学部が必要」と述べた。

また、赤間幸人稜北高校長は「道南エリアに教員養成の空白地帯を作ってはならない。函館校が教育拠点としてどういう役割を果たしているのかの再検討が大切」と語った。

企業の立場からの視点として、北海道中小企業家同友会函館支部の佐々木靖俊事務局長は「地域経済の活力として、函館校はなくてはならない存在。卒業生が各界で優れたコミュニケーション能力を發揮しているのも、教員養成課程があるからだ」とその意義を強調した。

また教育行政の立場から意見を述べた渡島管内町村教育委員会連絡協議会教育長部会の田中健一会長は「教員になりた」と考えている地元の青少年の求めに答え、函館校のもつ長い歴史的な経緯や役割も再編の際に十分考慮してほしい」と述べた。

コーディネーターは、函館大学の藤川隆教授が担当し、フロアーからも意見を



意見を述べるパネラー

求めた。

フロアーからは「今の教育にはリーダー養成の視点が必要。これまでの函館の教育では小・中・高・大の縦の一貫したつながりを大切にしてきた。これからもこのつながりは不可欠。教員養成の看板を下ろすことなく、拡充する方向で進めてほしい。そのために、函館校はもっと教育の成果・実績を積極的に発信し、自らが熱く語ってほしい。教員養成課程の存廃は、附属学校の存在意義にも大きくかわってくる。それは道南の教育の衰退をもたらしかねない。是非存続してほしい。」等が出され、パネラーとフロアーが一体となって、函館校の存在意義と今後のあるべき姿を語り合うフォーラムとなった。

（情宣部長 昭56年卒 古川邦彦）

会務報告



幹事長
奥崎 敏之
(昭和60年卒)

《一般会務》

7/12 第1回役員会が開催される。(函館)

7/15 会報第207号が発行される。

7/20 渡島支会長・幹事長会に橋田会長、奥崎幹事長が出席する。(函館)

7/26 乙部町の寺島町長と橋田会長が懇談する。(乙部町)

7/28 前田元松前町長と橋田会長が懇談する。(函館)

7/29 「函館校の未来を考えるフォーラム」が開催される。(函館)

8/9 本間学長と橋田会長、古旗参与が懇談する。(札幌)

8/9 道教委の高橋教育長と橋田会長が懇談する。(札幌)

8/16 星野副学長と橋田会長が懇談する。(函館)

8/17 渡島町村連合会事務局を橋田会長が訪問する。(函館)

8/21 江差町の鈴木教育長と橋田会長が懇談する。(江差町)

8/31 函館市の中林副市長と橋田会長が懇談する。(函館)

9/5 函館市の工藤市長と橋田会長が懇談する。(函館)

9/7 乙部町の寺島町長と橋田会長、星野副学長が懇談する。(乙部町)

9/12 星野副学長と橋田会長が懇談する。(函館)

9/22 指導主事等会の学習会に橋田会長、奥崎幹事長が参加する。(札幌)

10/6 5分校会長・理事長会議に橋田会長、奥崎幹事長が出席する。(旭川)

10/17 文科省に橋田会長と「道南の教育を考える会」の天野事務局長が署名を届ける。(東京)

10/18 函館校のマルチメディア国際語学センター開所式に、繪面副会長が出席する。(函館)

10/20 道央ブロック会議に青柳副会長、奥崎幹事長が出席する。(小樽)

10/22 第2回役員会が開催される。(函館)

10/29 大学本部に道南の教育を考える会、檜山7町村が要請書を提出。(札幌)

11/3 道北ブロック会議に奥崎幹事長が出席する。(稚内)

11/3 陸上部誌刊行記念会が開催される。(函館)

11/8 道南の教育を考える会と夕陽会役員会・顧問・参与会の合同会議が開催される。(函館)

11/10 道東ブロック会議に福井副幹事長が出席する。(根室)

11/12 工藤市長、中林副市長、片岡副市長、能登谷議長と「道南の教育を考える会」の安島代表、橋田会長が懇談する。(函館)

11/13 函館市の谷口企画部長と橋田会長が懇談する。(函館)

《支部総会・懇親会・同期会・個展等》

7/13 森支会、七飯支会、木古内支会の総会が開催され、天野副会長、橋田会長、平田副幹事長が出席する。

7/18 長万部支会の総会に橋田会長が出席する。(長万部)

7/18 福島支会の総会に奥崎幹事長が出席する。(福島)

8/4 55年同期会が開催される。(函館)

8/7 帯広七夕会が開催される。(帯広)

8/8 39年の会総会が開催され、橋田会長が出席する。(函館)

8/25 鶴陵会渡島支部総会に橋田会長が出席する。(函館)

9/3 夕陽音楽祭発足会が開催される。(函館)

ご就任おめでとう ごさいます

＊二七〇町教育委員会教育長就任

菊地 博四氏
(昭和54年卒)

＊足寄町教育委員会教育長就任

藤代 和昭四氏
(昭和49年卒)

＊紋別市教育委員会教育長就任

齋藤 房生四氏
(昭和50年卒)

9/15 高校支部総会に奥崎幹事長が出席する。(函館)

9/19 40年同期会が開催される。(函館)

11/10 北師渡島支部懇親会に奥崎幹事長が出席する。(函館)

11/16 六稜会渡島支部懇親会に繪面副会長が出席する。(函館)

受章おめでとう ごさいます

＊瑞宝双光章

乳井 邦衛四氏
(昭和19年卒)

函館市柏木町四〇の一八

村山 賢司四氏
(昭和22年卒)

函館市深堀町三二の三六

三条 純雄四氏
(昭和25年卒)

岩見沢市鳩が丘二丁目九

富田 繁四氏
(昭和26年卒)

札幌市北区北一二西一

ファミール北一二条三〇七

＊全国学校体育研究功労者表彰

小松 一保四氏
(昭和50年卒)

函館市日吉町四の二〇の二二



『陸上部史』完成なる！ 発刊を祝う会を盛大に開催！

編集委員長 青柳史匡
(昭和42年卒)

駆け抜けた九十七年一冊に

このタイトルは、北海道新聞十月二十三日付け夕刊「みなみ風」(道南版)に、陸上部史発刊が記事として載った時の見出しである。昨年十二月発行の夕陽會報第二〇五号で「只今母校陸上部史を編纂中」と紹介させていただいたが、一年後の今、こうして完成・発刊を報告できること嬉しく思います。

本誌は、総ページ二〇八P(A四判)、表紙は濃紺、題字は銀箔押しとなっている。掲載内容は、創部となった函館師範学校の大正四年から平成二十三年度までの九十七年の足跡を沿革年表と創部九十七年概括の二本立てでまとめあげ、初代から現在までの顧問、存命する顧問や高坂藤吉氏(十五年卒)を筆頭とする二十七名の部員の回想文、全国大会や北海道大会等の優勝者や入賞者、陸上界で栄章に浴した方々、記録編として函教大陸上部最高記録、種目別歴代記録二十傑、大正時代から始まった函館や北海道中等学校大会入賞者、部員名簿等々となっており、随所に大正時代からの貴重な写真が百七



発刊された陸上部史

十枚を載せている。

編集委員会を正式に発足させて一年と数か月、準備期間を含めると完成までに二年の歳月を要した。資料不足などから不十分な箇所は多々あるが、今後の課題とし、調査を継続していきたい。ただ無念であったのは、発刊を楽しみにしておられた六名の方が、この二年間に相次いで鬼籍に入られたことであった。

この度の編纂・発刊となったのは、陸上部OBやOG、同窓生、夕陽會、道南陸協等からの協賛金のお陰で、心から感謝している。陸上部の過去を知り、今を見つめ直し、明日への挑戦に寄与する一冊となることを願っている。

なお、発刊なった部史に若干の残があります。ご希望の方は連絡いただきました。

絆を実感した「陸上部史発刊を祝う会」

十一月三日(土)の文化の日、午後五時から函館駅前のロワジールホテル函館で「陸上部史発刊を祝う会」が開催された。

当日は、地元道南地区はもとより、遠くは宮城県、道内は札幌市や伊達市等から四十名が参集した。年齢層が会場を迎える方から現役の陸上部主将・マネージャーまで、幅広い年齢層が会場を埋めた。

司会進行は海野厚二君(五十八年卒)が務めた。会に先立って鬼籍に入られた恩師や諸先輩・同輩・後輩に黙祷を捧げた。鶴宗三郎君(四十七年卒)の開会宣

言の後、主催者挨拶(青柳)があり、鈴木博元顧問、櫻庭辰弥氏(三十二年卒・道南陸協会長)から祝辞をいただいた。祝杯の音頭は斎藤文雄氏(三十四年卒)が務め、杯を声高らかにあげた。

会食・懇談が進む中、米谷元捷前顧問、内藤一志現顧問(五十六年卒・教授)、瀬戸正岐君(六十年卒)、大村悠斗君(現主将)のスピーチがあり、当時の思い出や近況を語り、発刊を祝い合った。

特に、瀬戸君は東日本大震災の被災地気仙沼市から参加し、「惨状のひどさ、遅々として進まない復興、自身が精神的に萎えて後ろ向きになりがち時、部史が贈られてきた。自分が頑張っていた時の写真が多数掲載されていた。添えられた手紙も嬉しく、前を向いて頑張る気持ち強くした。皆に会いたい、会ってお礼を言いたくて参加した」と熱く語って万雷の拍手を浴びた。部史発刊の意義の一端を実感させてもらった。

会場は時の経過とともに盛り上がりを見せ、恩師・先輩・後輩間わず交流の輪がいくつもできて盛り上がり、談笑が絶えなかった。

会是小川智博氏(三十六年卒)が作詞した「陸上競技讃歌」披露の後、全員で寮歌を力一杯歌い、前田治彦君(五十年卒)が声高らかにエールを切ってくれた。最後の乾杯の音頭は猪狩照彦氏(三十年卒)が務め、万歳三唱で締めくくった。名残は尽きなかったが、増野芳幸君(四十八年卒)からお披露言の言葉があつて全て終了。会の始めに撮った集合写真を土産

に三々五々帰路につかれた。先輩と後輩の絆を再確認する素晴らしい祝いの会になったことを、企画・運営に当たった編集委員一同素直に喜び合うと同時に、感動の余韻を今もって酔いしれている。

連絡先 編集委員長 青柳史匡(ふみただ)
〒002-8008
札幌市北区太平8条5丁目5-7

電話・FAX 011-772-8532



支部の歴史をふりかえって



小樽支部の歴史をふり返って

小樽支部長 渋谷和則
(昭和54年卒 小樽市立桜町中学校長)

小樽支部では、代々先輩達から受けついでていることがあります。

一つ目は、本部夕陽会の誕生と同時に、当支部が発足し継続し活動していること。二つ目は、支部総会の資料には、「土地墾闢」「人民蕃殖」の二文字を必ず掲載し確認し合うことです。

支部役員となっても、さしたる理由、疑問に感じることなく、先輩の教えを守ってきました。

今回、執筆依頼を受け、改めて支部の歴史をふり返る機会を頂き、引継ぎ文書などを整理したところ、歴史をふり返る古いものが一切無いことに気づきました。先輩や大先輩に問い合わせたところ、同様のことでした。

遂方に暮れ本部会員名簿をたよりに、大正七年卒業生のお名前が、市内各学校の旧職員名簿に記載されていないか、記念誌などをもとに探してみました。大正時代の職員名簿も無い状態でした。今年度の小樽支部総会は、九十四回を数えます。間違いなく本部総会回数と同じであります。第一回卒業生が、各地に赴任し、夕陽会を立ち上げたものと単純に思っていました。がそうではないかもしれない。

そんな時、小樽校陽高等学校百年記念誌(前身 北海道庁立小樽高等女学校)を見ていたところ、旧職員名簿からは、

夕陽同窓生の手掛かりは見当たりませんでした。

ところが、第二十五代校長 本間正啓氏の寄稿文に、「明治四十一年七月十日付で、初代札幌高女の校長 小林 到校長を迎えます。小林校長は四十四歳、旧福岡藩の士族で函館師範・中等師範学科の出身でした。大正二年、創立七周年の五月、悲壮な痛みに堪えながら最期の訓示をして、手術のため上京します。食道癌と診断され、東京順天堂病院にて死亡される、とあります。本校には四年十月九日在職されますが、享年五十歳の生涯でした。」とあるのを見付けることができました。

しかし、年代があいしません。疑問のまましばらく、手掛かり求めていました。

どうしても気になり、「函館師範学校」でコンピュータで検索してみると、「本校の歴史は、明治七年、開拓史より設立を許可された函館小学校教科伝習所に始まり、同所はその五年後、明治十三年官立函館師範学校と改称しました。その後明治十五年、県立函館師範学校に改称し、明治十九年に北海道師範学校函館分校が設立されました。それが、明治四十五年に文部大臣より認証され「土地墾闢」「人民蕃殖」の理念のもと、北海道函館師範学校として装いも新たにスタートしたのは、大正三年のことでした。」と記載されてい

ました。

小林校長が、県立函館師範学校卒業であることや、夕陽会が誕生したときには、もうすでに各地で活躍されていた先輩達がいらっしゃったことが分かりました。

当時の小樽は、日本で二番目に鉄道が敷設され、金融業、鉄鋼業、二シンをはじめとする漁業が盛んでありました。現在でも歴史的建造物が残っており、歴史の町といわれるほどです。

大正期の庶民生活は、全国から一攫千金を夢見る人であふれ、暮らしは決して豊ではなかったことが伺われます。

人口増加により、小樽でも各種の学校が創立されており、夕陽の大先輩も「土地墾闢」「人民蕃殖」の理念のもと子どもたちを育成していたに違いありません。

小樽支部の歴史は、ついには不明のままですが、設立当時の先輩達の熱意の一端だけでも紐解くことができました。

戦前、戦中、戦後と小樽支部の活動は継続し、ふるさとに夢と誇りをもち、たくましく生きる小樽の子どもの育成に尽力されました。特に、三好學氏(昭和七年卒)が、教育長(昭和四十三年〜五十五年)に就任し、教育の充実・発展に貢献されております。

近年の活動をふり返ります。年一度の総会・懇親会の他に、「老荘の集い」があります。

第一回は、昭和五十五年五月十一日、大和屋本店にて、小玉長左工門氏(大正十一年卒)、島倉勲氏(大正十三年卒)、工藤岩吉氏(大正十四年卒)の退職されていた御三名が発起人となり「昔を語り、今の生を確かめんと」のテーマのもとに退職者と現職を合わせて十四名の参加のもと開催されました。以後、今年度まで三十二回を数えます。毎年、退職された先輩の中から幹事が選出され、会を企画・

運営してくださいます。今年度、来年度の幹事は、小山克満氏(昭和四十四年卒)、清橋義人氏(昭和四十九年卒)です。今年度のテーマは「子どもに期待すること」

「子どもにどのように生きる力をつけるか」と定め、先輩十一名と現職六名が和気藹々と話し合いをすることができました。また、他の先輩達近況報告などの紹介もあり、とても有意義な会であります。

当支部では、年二回の研修会を実施しています。近年は、夏は「小樽を再発見する」をテーマに、事業主を講師として、研修しております。光合金取締役会長、藪半(そば店)店主、この方々は小樽運河存続運動にも携わってきた方でもあります。小樽地ビールのマイスター、ドイツの方で日本語が上手です。職種を越えたお話を聞く機会を設けております。今年度は、教職外の新卒会員が参加し、講師をはじめ参加者に大いに可愛がられておりました。

冬は、学校ですぐに実践に役立つことをテーマに、小樽市教育委員会、道立教育研究所等の協力を得ながら、研修を進めてきました。なかでも、札幌大学名誉教授(詩人)原子修氏(昭和三十年卒)の講話は、大変印象的でありました。

今年度は、道央ブロック会議の当番支部でありました。札幌、石狩、空知、後志、小樽の五支部が集まり、本部の動向、各支部の現状など交流し合い実りのある会議となりました。懇親会では、書面には表すことのできない本音や苦労話、教育大学構想のお話などを聞くことができ大変ありがたい思いをしました。

最後になりますが、小樽支部の九十四年の歴史のごく一部をふり返り、大先輩達の功績に感謝するとともに、この機会を与えてくださったことにお礼を申し上げます。

教壇で活躍する若き夕陽教師たち



出会いを大切に

加恵田 庸子

(平成22年卒 函館市立深堀小学校教諭)

「教員になりたい。」と言って、生まれ育った石川県から教育大学に入学するため函館に来ました。函館校での六年間、卒業してから三年と、函館に来て九年目になりました。

高校生で進路を決める際に悩んでいる時に小学校三年生のときの担任の先生を思い出しました。「最後の担任があなたたちでよかったです。あなたたちに出会えてよかったです。」をおっしゃっていました。厳しい先生でしたが、とても信頼

できる先生でした。私も人と出会ってよかったですと思うことができるように仕事ができたらと思い、教員を目指しました。教員採用試験に合格して二年になりました。現在は小学校四年生の担任をしています。

昨年四月、右も左もわからないまま担任としての日々がスタートしました。毎日授業をすることで精いっぱいでした。ただ、授業をしても曖昧な指示や質問が多く、子どもたちは困惑していました。なんとかかわかってくれようとしているけれどそれに応えることができず、自分の力

のなさを実感する毎日でした。

そんなとき、先輩の先生方にたくさん見えていただき指示の出し方や子どもの接し方などをアドバイスしていただきました。私は、教えていただいたことや先輩の先生方の良いところを真似しようと努めてきました。

この二年間、わかりやすい授業ができるように、行事などは一人ひとり目標をもって取り組むことができるように、子どもたちと一緒に努力してきました。まだまだ初めてのことに戸惑うことも多くありますが、先輩の先生方や初任者指導教官から親切なご指導や励ましをしていただいています。子どもたちがいきいきと活動する姿や、何事にも一生懸命に取り組む姿勢が成長する姿を見ることが、この仕事のすばらしさに気づき、また責任の重さを感じました。

これからは学び続けることと、子どもたち一人ひとりの視点に立つて指導することを大切にこれからの教員生活を歩んでいきたいと思っています。



ともに学び、ともに育つ

鎌田 尚吾

(平成22年卒 函館市立戸井西小学校教諭)

平成二十二年三月、北海道教育大学大学院を修了し、二年間の期限付き教諭を経て、今年度より函館市立戸井西小学校で勤務させていただいております。教壇に立ち続けていられる喜びを感じながら、充実した毎日をご過ごしております。

自然豊かな函館……。その中でも、私の勤務する地域は特に恵まれた自然環境に位置しており、学校から展望できる海の景色や吹き抜ける潮風に、日々心地良さを感じております。また、学習や行事などで協力を頂くなど、地域の方々にも支えられながら教育活動を行っております。

現在は五年生の担任として、児童一人ひとりの理解に努め、適切な指導や支援を行うため、そしてわかる・できる授業を実践するために、日々研鑽を積んでおります。

しかしながら、学級経営や学習指導、生徒指導等の様々な場面で頭を悩ますことが多く、改めて教師という仕事の難しさや自分自身の未熟さを痛感しました。場や目的に応じた適切な言葉かけ、見通しをもった意図的・計画的な学習計画、教材研究、児童が思考しやすい発問、板書の構造化、様々な角度からの児童理解、困り感のある児童への支援……。

悩みが尽きない毎日ではありますが、いつも多くの先生方からご助言や励ましを頂き、感謝の気持ちが増えることはありません。

そして何より、子ども達が毎日元気に登校する姿、一生懸命に学習に取り組む姿、自分自身の成長を実感した時の笑顔……。子ども達の変容の姿や、その表情一つ一つが私にとって宝物であり、教職の素晴らしさに感銘を受けております。「学ぶ教師が学ぶ子どもを育てる」という理念を大切にしながら、子ども達のもとに豊かな育みに貢献したい思いで満ち溢れています。

子どもはちゅうりっぷである……。色や高さの違いはあっても、すべての花が綺麗なように、子ども一人ひとりかけがえない素敵な存在である……。そう教えてくれたのは、夕陽会の先輩でした。

子ども達にボールを投げると、どんな時でも一生懸命そのボールをキャッチし、投げ返そうとしてくれます。そんな子ども達一人一人の良さに気づき、秘められた可能性を十分に発揮させるため、今後日常的なかわりを疎かにすることなく、「共働共汗」の姿勢で、全力で子ども達とふれ合っていきたいと強く思っております。そして、ともに学び、ともに成長していきたいと思えます。まだまだ未熟者であり、夕陽会の諸先輩方の皆様には、多くのご指導、ご支援を頂く場面も多々あるかと思いますが、今後ともよろしく願いいたします。



故郷函館を離れて

武田 秀文

(平成21年卒 室蘭市立水元小学校教諭)

私は今年の四月、新採用教員として室蘭市立水元小学校へ赴任することになりました。北海道教育大学大学院(函館)を卒業して早三年が経ち、その間函館近辺の小学校で期限付き教諭をしながら、採用に向けての勉強に励んできました。

実際に採用になって思うことは、期限付き教諭として過ごした時間は少しも無駄ではなかったということです。いくつかの学校を経験し、たくさんの人々と関わってきたことよって、今の自分があるのだと感じています。様々なアドバイスを下さった校長先生・教頭先生をはじめ、教師として生きる見本となった同僚の先生方や研究会等でお世話になった先生方。そして、私のことを先生と呼び、共に過ごした子どもたちから、数多くの財産を吸収することができました。

生まれてから二十七年間慣れ親しんできた故郷函館を離れ、室蘭に来て八カ月程経ちます。私の生活力があまり無いことを知る周りの人には、新しい場所に行くことになった時、「大丈夫か?」と大変心配されました。私自身、新天地に不安半分、期待半分といった感じでした。新しい環境での生活には戸惑うところも多々ありましたが、職場はとも明るく頼もしい諸先生方に恵まれ、毎日のびのびと過ごすことができています。

ある先生に、このようなことを教えていただきました。「先生が忙しそうにしていたり余裕がないと、子どもたちも気



を遣つていきいきできないよ」。おそらく、ただ仕事をこなして忙しそうにしてる私を見ての指摘だったと思います。この言葉を聞いたときは目から鱗でした。それからは、子どもたちをはじめ人前ではおらかな雰囲気で行われるよう努めています。もちろん無理はできませんが、余裕を持てるようにと意識することの良さや、あらゆる場面を感じています。今後も、驕ることなく精進してまいります。最後になりましたが、今後とも夕陽会の皆様にはお世話になるかと思えます。その時はどうぞご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。



感謝の気持ちを忘れずに

五十嵐 真由美

(平成17年卒 函館市立千代ヶ岱小学校教諭)

「勉強楽しかったよ。」「先生、わかったよ。」「見て、できるようになったよ。」と、言いながらのぞかせる子どもたちの笑顔を見るたび、教師という仕事のやりがいを実感しています。

平成十七年三月、北海道教育大学函館校を卒業し、今年度より函館市立千代ヶ岱小学校で勤務させていただいております。二十名の四年生の担任となり、正採用教諭となった喜びを嘯みしめながら、充実した毎日を過ごしています。失敗ばかりの私ですが、明るく元気な子どもたちに助けられることが多々あります。そんな子どもたちに私は何ができるのだろうか。悩みは尽きませんが、子どもたちの成長する姿を見られるのが大変うれしく、これからも子どもたちの笑顔が見られるようにと日々努力しています。

大学卒業から七年間は、小学校・中学校・高校で、時間講師や期限付教諭として勤務しておりました。なかなか教員採用試験に合格できず、「教師に向いていないのではないか。」「こんな私が教師をやっているのか。」という気持ちや抱えていました。

やっと試験に合格できたものの不安でいっぱい毎日でした。初めての経験ばかりで、時間に追われ、学級経営、学習指導、生徒指導などうまくいかない日々。教師としての責任の重さを痛感し、思い悩み、自信をなくすこともありました。

しかしながら、いろいろな先生方の実践を見てきたこと、中学校や高校で英語を指導していたこと、複式学級を担任していたことなど、今までやってきたことを生かせる場面が度々ありました。この七年間は無駄になっていなかったと確信を持てるようになりました。子どもたちにも、夢を持ち、その夢に向かって一生懸命努力することの素晴らしさを教えていきたいと思うようになりました。

また、思い悩んでいる私に、そっと手を差し伸べてくれたのは、多くの先輩方です。授業についてアドバイスをしてくださったり、子どもへの接し方を教えてくださったりと、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。先生方との会話の中から、子どもの新たな一面を見つけることもあります。

まだまだ未熟者ではありますが、周りの方々への感謝の気持ちを忘れずに、全力で子どもたちのために一生懸命取り組んでいきます。子ども一人ひとりが自分らしく安心して過ごせるように、自己研鑽に励みたいと思います。

今後とも、夕陽会の皆様にはお世話になるかと思えます。ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



第10回 夕陽音楽会のご案内

このたび、教育・文化の創造に寄与し、地域の興隆に資することを目的とし、次のように「夕陽音楽会」を開催する運びとなりました。

本音楽会も今年で10回目を迎え、節目の年となりました。

皆様のご来場を心よりお待ちしております。

1. 日 時 平成25年1月26日(土)

開 場 13:00 開 演 13:30

2. 会 場 函館市芸術ホール

3. プログラム

- ◇ 混声合唱 夕陽混声合唱団 指揮/長谷川 吉秀 ピアノ/若佐 英子
- ◇ 合 唱 函館市立深堀中学校合唱部・オレンジカルサイトアンサンブル合唱団
指揮/辻 真紀子 ピアノ/類家 唯(賛助)・蓼田 なつき(賛助)
- ◇ フルート独唱 佐藤 知歩 ピアノ/宮腰 史江
- ◇ 二台ピアノ 吉本 有佑・畑中 一映(賛助)
- ◇ 合 唱 北斗市立上磯小学校合唱部
指揮/飯田 奈穂子 ピアノ/小寺 奏子(賛助)
- ◇ メソプラノ独唱 田中 則子 ピアノ/佐々木 茂
- ◇ テノール独唱 大村 義美 ピアノ/大村 陽子(賛助)
- ◇ 金管バンド 函館市立日吉が丘小学校金管バンド 指揮/古川 典之
- ◇ 吹 奏 楽 函館市立桔梗中学校吹奏楽部 指揮/横井 真

4. 入場について

- 入場は無料ですが、整理券が必要です。ご希望の方は夕陽音楽会事務局までお問い合わせください。
- ※ 満席の場合は一部入場をお断りする場合があります。

5. 夕陽混声合唱団について

- 夕陽混声合唱団は、どなたでも参加できます。ご希望の方は、お誘い合わせの上ご参加ください。参加申し込みは、随時受け付けております。夕陽音楽会事務局までお問い合わせください。

6. 問い合わせ先 夕陽音楽会事務局 北海道教育大学附属函館小学校 中條由紀子

〒041-0806 函館市美原3-48-6

電 話 46-2235

F A X 47-7376



函館市支部だより

函館市支部長 青木 昌史
(昭和53年卒 函館市立戸倉中学校長)

横津連峰も真っ白い衣を身にまとい、我が夕陽の街「函館」にも冬の足音が聞こえてきました。

昨年度より我が母校のお膝元である夕陽会函館市支部長を仰せつかり、二年目の任期も後半となりました。本部、橋田恭一会長、奥崎敏之幹事長をはじめ、役員の皆様、多くの現役・先輩会員の皆様に支えられながら日々の活動をさせていた、だいております。函館市支部は、会員約一四五〇名を擁する大所帯です。現任教職員の多くは夕陽の仲間であり、本会を足下から支えていくべき責任の大きさを肌で感じております。

さて、今年度の活動を紹介いたします。本支部は前支部長の時代より「地域貢献」、「民間同窓生への組織拡大」の二大テーマをもって活動を進めてきています。五月には、幹事会および新会員・転入会員・幹事懇親会を行いました。橋田会長をお招きし、二十一名の新たな仲間を招いての楽しい会となりました。

六月には、本部総会・大懇親会のお手伝いをさせていただきました。昨年度は、十年に一度の札幌大会でしたが、今年度は例年通りの地元開催となり、約五百名の仲間が一同に会し、思い出を語り合いました。夕陽讃歌に始まり寮歌で締めると素晴らしい会となりました。

また、夏には、母校が北海道教育大学

の新学期構想の渦に巻き込まれていることから、「函館校の未来を考えるフォーラム」への参加や嘆願書の依頼など様々な活動を展開してきました。

今後の大きな活動としては、第一に来年二月十五日(金)に予定しております「函館市支部受賞祝賀会」の開催です。現在の函館校では、地元に残る卒業生の多くが民間企業等に就職しています。以前はこの祝賀会はずべてのテーブルが学校関係者で賑わっていましたが、今後は民間社会に羽ばたいた若者たちも包み込んでいく同窓会をめざしていかなければならないと感じています。そのために、一名でも多くの若者が「夕陽の絆」を感じられるような祝賀会を企画します。

第二に「地域貢献事業」です。昨年度は、五稜郭公園内に開設された箱館奉行所に和風のフロアライトを寄贈させていただきました。今年度も支部の皆様と相談しながら、このような取組を進めて参りたいと考えています。

函館市支部は、先輩諸氏が築きあげてきた伝統をしっかりと守り育てていくと同時に、我が「函館校」の発展のために微力ではありますが、本部と連携しながら様々な活動に全力で取り組んでいく所存です。

全国各支部・会員の皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



苫小牧支部だより

苫小牧支部長 川上 博
(昭和52年卒 苫小牧市立大成小学校長)

ご縁あつて当支部・支部長を仰せつかつて、早三年が経ちます。

当支部は、全道的に人口の伸びが期待できない状況にあつて、珍しく人口が横ばいにある全道五位にある十七万都市・苫小牧。市勢の躍進は留まらず、新設校がここ数年で二校、平成二十五年度にも一校が開校する全道的にも珍しい街であります。

新興都市・苫小牧ということで、歴史が浅いように思われますが、昭和二十四年には既に支部として規約を定め、二年回の例会を開催したと第八十五号夕陽会報に掲載されております。

そのような歴史ある当支部ですが、平成二十四年度の苫小牧支部会員数は、現職同窓数が約百四十名(期限付、講師等含む)会費納入者と異なる、OB会員が約七十名の約二百十名。小・中学校合わせて三十八校のうち校長・教頭が十七名。また、教職員合わせて苫小牧市の教職員数が約九百名のうち同窓の占める割合は、二割弱となります。

近年は、同窓教職員の転入がなかなか厳しく、ここ数年会員の伸びも芳しくない状況にあります。

胆振の中でも、道央に近いこともあつて、北師、鶴陵、六稜、青陵が混在する中、夕陽会胆振連合支部(室蘭市、苫小

牧市を除く市町で構成)、室蘭支部と連携し、後継者育成事業等を行い、「行動する夕陽」、「研修する夕陽」を標榜し、その実践に日々努めております。

当支部では、五月の総会と二月に大懇親会を開催し、本部橋田会長から母校の情勢をうかがうとともに、支部会員の親睦を深め、同窓の絆を強める活動を行っています。

さて、他支部同様、最大の課題は、同窓意識を引き継ぎ、強めることでもあります。そのため、新卒者の面倒(教職に就いた直後の種々のアドバイス等)と後継者(管理職等への指導)の育成に努めているところです。

また、「女性の集い」を毎年開催し、美味しい食事しながら女性ならではの和やかな会話の中で、学生気分を再燃する機会を企画し交流を深めております。いつの時代も教育課題は山積し、課題解決は至難の業ですが、同窓という有難い絆を宝に、会員の親睦・情報交流とそれぞれの立場での資質向上・研鑽を念頭におき、役員一丸となり組織強化に取り組む所存であります。

今後とも、本部並びに全道・全国各地の支部・会員の皆様のご指導とご鞭撻をよろしくお願いいたします。

支部だより

前納会費納入会員名簿追加分

稲村陽一 旭川 昭45 笠井佳代子 函館 昭49
日向稔 函館 昭49 島津彰 札幌 昭48

(平成二十四年十一月二十二日現在)

夕陽会員訃報

Table with 3 columns: Name, Address, and Date of Death. Includes names like 蝦名 良治氏, 札幌市南区藤野5の7の18の7, and dates like 昭33, 昭45.



前納会費制度

利用の仕組み

夕陽会本部通常会費の納入には、前納会費制度があります。ご退職された方は是非、この制度をご利用くださるようお勧めいたします。

前納会費納入会員は、会員名簿に納入者の○印を付して終身会員として、次のような特典が受けられます。

①記念品(人民蕃殖の白扇)の贈呈
その他不定期発行の記念品等の贈呈

②夕陽会報(年三回発行)と会員名簿(隔年発行)の本人への贈呈

③前納会員への加入切り替えを会報に通知掲載その他慶弔規定の適用
前納会費の額は、卒業年次により次の四段階になっております。

①大正年代の卒業生 五千円
②昭和年代の卒業生のうち昭和五十年までの退職者 一万円

③同じく昭和五十一年以降の退職者 二万円
④平成元年以降の退職者 三万円

ご希望の方は、本部(附属小学校内財政部担当)へご一報ください。振替用紙を送付いたしますので、簡単に手続きが済みます。

なお、函館市支部と渡島支部でも支部終身会員制度をとり、その推進・拡充を図っております。両支部とも終身会費は一万円であり、それぞれ特典があります。

編集後記

◆会報第二〇八号をお届けいたします。今回も、皆様から多くの玉稿や貴重な写真等をお寄せいただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

◆今号の表紙は、今年はじめ新校舎が落成した函館市立弥生小学校の校舎正面の写真です。古き伝統の中に息づいていた旧校舎のよさをそのまま生かし、かつての外観を保ちながら、高度な建築技術によつて見事に新築されました。

◆さて、今春より母校函館校の新学部構想を巡って様々な動きがありました。道南の教育振興に大きな役割を果たしてきた母校を、今後さらに発展させ、南北海道の教育の拠点としていくことは私たち夕陽会の使命でもあります。これからも様々な困難が予想されますが、同窓が気持ちを一つにして、更に地域に貢献する函館校となるよう支援することが大切であると考えています。

◆全道全国各地で、卒業した若き夕陽の仲間たちが、教師としてあるいは民間企業人として活躍しています。今後若手の活躍を取り上げていきたいと考えています。どうぞ各地で活躍する夕陽会員の情報をお寄せください。

◆また、ぜひ掲載してほしい情報・取材してほしい題材等、どしどし本部事務局や情宣部にお知らせください。お待ちしております。

(情宣部長 古川 邦彦記 昭56卒)

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。
041 0806 函館市美原3丁目48番6号
北海道教育大学附属函館小学校内
夕陽会本部事務局
電話番号(011338) 46-22235
夕陽会専用(011338) 34-15520
FAX番号(011338) 47-73776

題字 文化勲章受章者 金子賢蔵(鷗亭)氏(昭4卒)